

早期スポーツ教育についての一考察－親の在り方について－

1200505 福島彩子

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

早期スポーツ教育についての研究はこれまでもあるが、子ども目線での早期スポーツ教育に論点をおいているものは無い。そこで本研究では、小学生以下を早期と捉え、早期スポーツ教育のより望ましい親の関わり方を若い選手の視点から解明することを目的とする。本研究に際して、子供の成長にとって悪影響な経験や傷つけることを積み重ねることで『死にたい』、『誰かを殺したい』というネガティブなメンタルが形成されると考える。そのネガティブなメンタル形成の実態アンケート調査を行い、その結果より、ネガティブなメンタル形成から子どもを守るための親の在り方を明らかにする。本研究の結果、試合で負けた後のメンタルが特に重症化が起きていることが明らかになった。また、早期スポーツ教育を始める年齢にも限度があることが確認された。

2. 緒論

近日、2020年に行われる東京オリンピックを目前に様々なメディアがスポーツを取り上げており、特に注目されているのが卓球である。その中でも特に注目されているのは、張本智和選手や伊藤美誠選手、平野美宇選手などの若い選手である。それらの選手の多くはJOC (Japanese Olympic Committee) エリートアカデミーという日本オリンピック委員会が管轄する団体に所属している、又はしていることがわかっている。JOC エリートアカデミーとは国際競技能力及びその安定的な維持の施策の一環として、将来オリンピッ

クをはじめとする国際競技大会で活躍できる選手を恒常的に育成するために2008年に設立された。これらの活動はスポーツ振興くじの助成金を受けて実施されている。味の素トレーニングセンターを生活拠点として、全国から発掘された素質のあるジュニア選手を近隣の学校に通学させながら、各競技団体の一貫指導システムに基づいた指導を行っている。現在はレスリング、卓球、フェンシング、飛び込み、ライフル射撃、ボート、アーチェリーの7競技を対象としており、2019年度の在籍者数は33名（レスリング9名、卓球5名、フェンシング1名、飛び込み2名、ライフル射撃4名、ボート5名、アーチェリー7名）となっている。対象者は中学1年生から高校3年生までで、入るためには全国優勝やアジア大会でランクに入ることなどとても厳しい条件をクリアしなければならない。本研究では、この7競技の中でも特に顕著な成績を上げている卓球にフォーカスしていく。

先ほど述べたJOC エリートアカデミー生のよう世界で活躍するような選手になるためには幼少期からスポーツに励まなければならない。そこで重要なのは早期スポーツ教育であると考え。早期スポーツ教育のやり方次第では卓球のレベルは大きく変わってくる。しかし、早期スポーツ教育は子どもが未成熟であるため、親の後押しが必要である。従って、親の考え方や接し方が重要になると考える。

早期スポーツ教育に関する先行研究として、石山等は大人と子どもの間には乖離した思いが存在

しており、この両者の隔たりが子どもたちのスポーツを通しての成長、発達に様々な影響が確認されたと報告している（石山等（2012.p. 31)）。また、小倉等は、スポーツを提供する指導者の方針と「IPU（International Pacific University）スポーツサークル」に通う小学生の保護者の親の期待に大きな違いはなかったことを明らかにしている（（小倉等 2017.p.69)）。しかし、これらの研究は指導者や親などの大人中心の研究であり、子ども目線での早期スポーツ教育に論点をおいているものは無い。

そこで、本研究の目的は選手の視点から早期スポーツ教育を研究することで、若い選手にとってより望ましい親の関わり方を解明することを目的とする。ただし、卓球を対象とし、JOC エリートアカデミーではなく一般的な早期スポーツ教育について研究していく。また、本研究の早期スポーツ教育の定義としては、小学生以下を早期と考える。

3. 本研究のフレームワーク

本研究では、上述のようにネガティブなメンタルを対象とする。ここで、ネガティブとは子どもの成長に悪影響な経験、傷つけることとする。一方、それに関わる親の在り方は、早期スポーツ教育を子供に実施するに当たって、子どものメンタルを守るために親が気を付けるべきこととする。

早期スポーツ教育の成果を評価するには、まず事後評価を基本とする（図 3.1）。しかし、早期スポーツ教育は子供が未成熟であるため心に傷を抱えやすい。そのためプロセスを見ていかなければならない。本研究の研究対象であるネガティブなメンタルは、「練習が多い」、「試合で負けて怒られた」などの具体的な事象が積み重なって形成されると考える（図 3.2）。

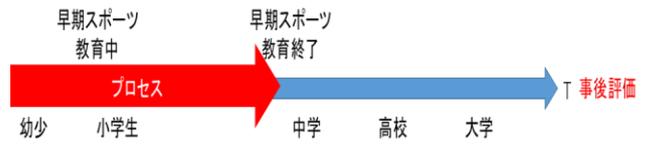


図 4.1 早期スポーツ教育のプロセス

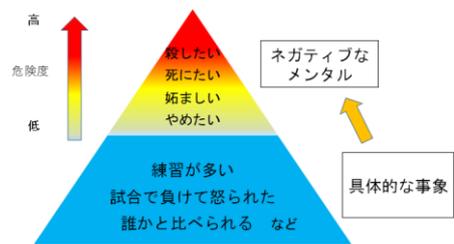


図 4.2 ネガティブなメンタル形成

形成されるメンタルは危険度が低いものでは『卓球をやめたい』、中のものでは『誰かが妬ましい』、高いものでは『死にたい』、『誰かを殺したい』という危険なメンタルが形成される。その形成されるメンタルは、早期スポーツ教育のプロセスの中で一様ではなく、場面によって異なると考える（図 3.3）。そのため、早期スポーツ教育の中で存在する場面を時間軸で細分化して、場面毎に分けてアンケートを行う（図 3.4）。

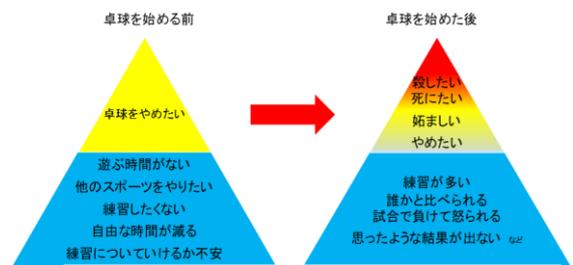


図 4.3 場面に分けてとらえる

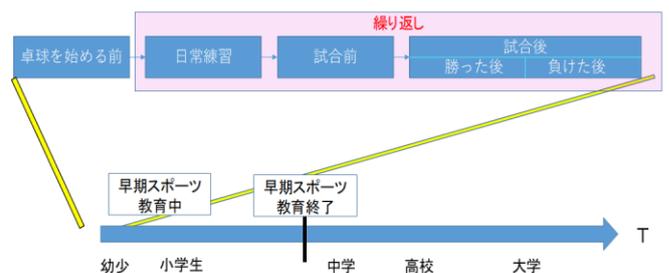


図 4.4 時間軸でメンタルを細分化

4. アンケート調査

実施したアンケート調査は Google フォームを使用し、URL を配信して回答を依頼した。2020年1月22日から2020年1月24日までを回答期間とし、小学生以下から卓球を始めた大学生の1から4回生までを対象として行った。有効回答数は160件で男女比は男性55.6%、女性が44.4%となった。またアンケートを回答してくれた大学は43大学であった。

アンケート調査項目は、①早期スポーツ教育を始めた年齢、②早期スポーツ教育を始めたきっかけ、③過去を振り返って早期スポーツ教育は自分の成長にプラスだったか、④卓球を始める前に嫌だったこと、⑤卓球を始める前に嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか、⑥日常練習で嫌だったこと、⑦日常練習で嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか、⑧試合前に嫌だったこと、⑨試合前に嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか、⑩試合で勝った後に嫌だったこと、⑪試合で勝った後に嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか、⑫試合で負けて嫌だったこと、⑬試合で負けた後の嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか、という計13問である。その回答結果は次に示す通りである。

①早期スポーツ教育を始めた年齢は、42.1%が7歳から9歳で卓球を始めたことが分かった(図4.1)。

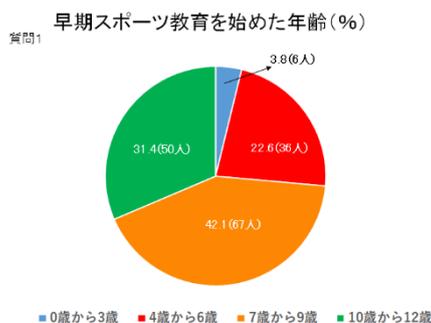


図 4.1 アンケート結果①

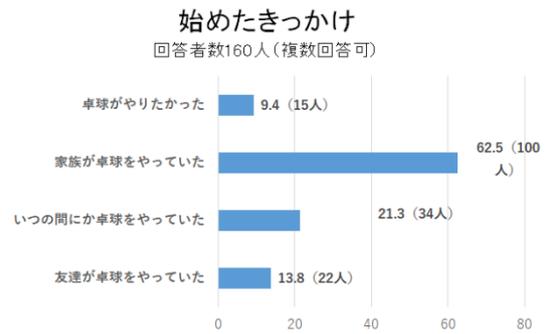


図 4.2 アンケート結果②

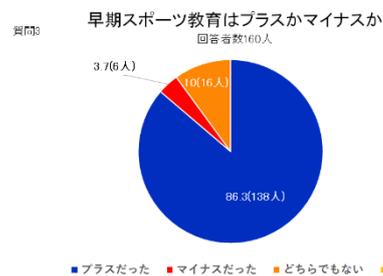


図 4.3 アンケート結果③

②早期スポーツ教育を始めたきっかけでは家族が卓球をやっていた人は62.5%で、卓球がやりたくて始めた人はわずか9.4%であった(図4.2)。これらのことから自発的に早期スポーツ教育を始めたとは考えられない。しかし、自発的に始めていないのにも関わらず、③事後評価では、早期スポーツ教育がプラスだったと答えた人は86.3%と圧倒的に多かった(図4.3)。ここで、④早期スポーツ教育を始める前に嫌だったことは図4.4に示す通りである。自発的にやっていないことから、不平不満が多いことが分かる。しかし、⑤卓

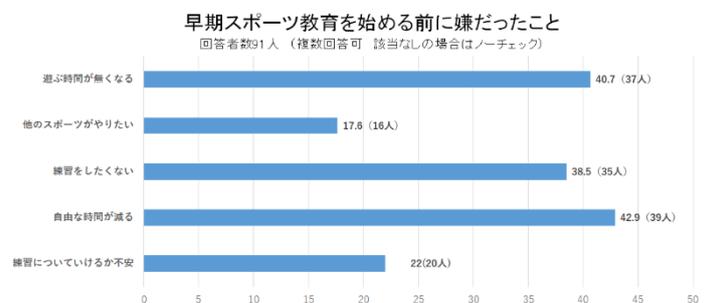


図 4.4 アンケート結果④

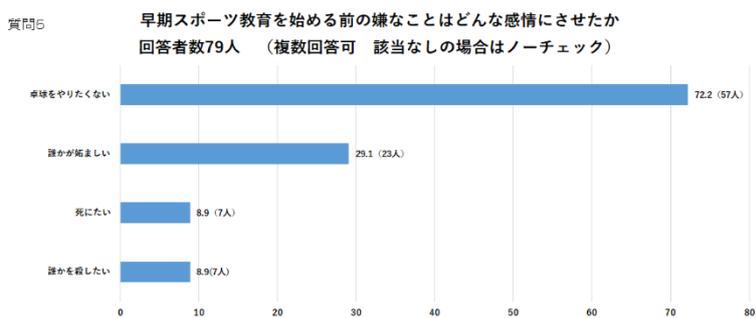


図 4.5 アンケート結果⑤

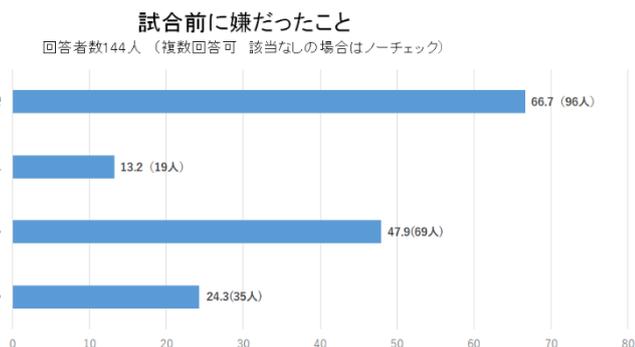


図 4.8 アンケート結果⑧

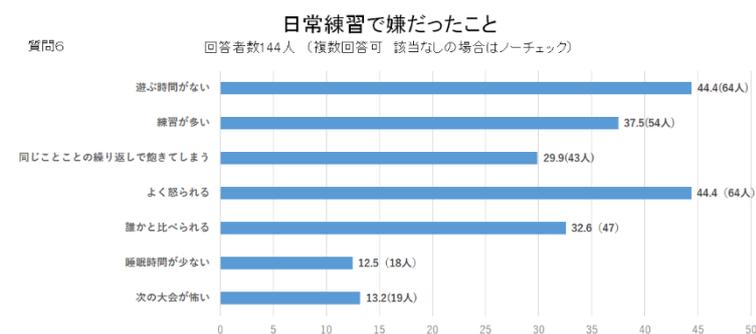


図 4.6 アンケート結果⑥

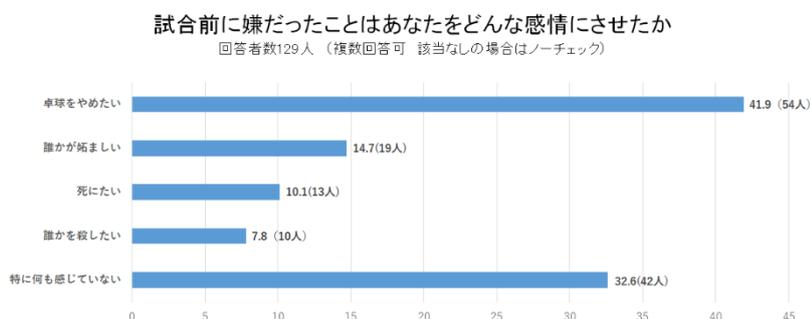


図 4.9 アンケート結果⑨

球を始める前ではまだ『卓球をやりたい』という感情に留まっており、『死にたい』、『殺したい』というメンタルの重症化は起こっていない(図 4.5)。

そして⑥日常練習が始まるとやはり不平不満を持ちながら練習に取り組んでいることが分かる(図 4.6)。しかし、⑦日常練習ではまだメンタルの重症化は見られない(図 4.7)。

⑧スポーツの節目として試合に臨むようになると、不安感が垣間見られる(図 4.8)。しかし、⑨

試合前でもまだやめたいというメンタルに留まっており、メンタルの重症化は起こっていない(図 4.9)。⑩試合に臨み勝った後は喜んでいそうだが、実際はそうではなく、プレッシャーやもっと上のことを求められるなどの嫌な事象が起こっている(図 4.10)。しかし、⑪試合で勝った後もまだメンタルの重症化は見られていない(図 4.11)。⑫試合で負けた後は負けた時ならではの様々な嫌な事象が起こっていることが分かる(図 4.12)。⑬試合で負けた後は『卓球をやめたい』と

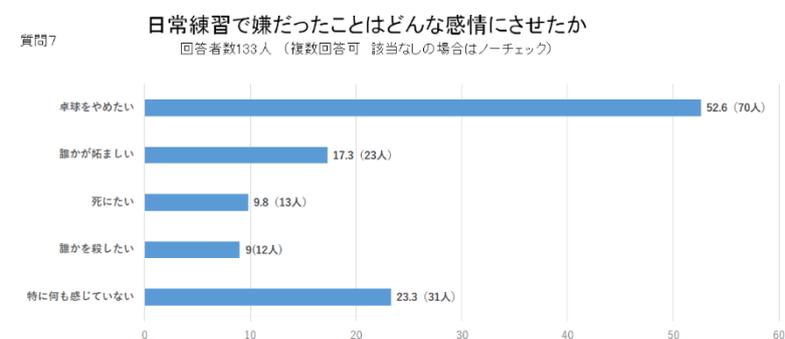


図 4.7 アンケート結果⑦

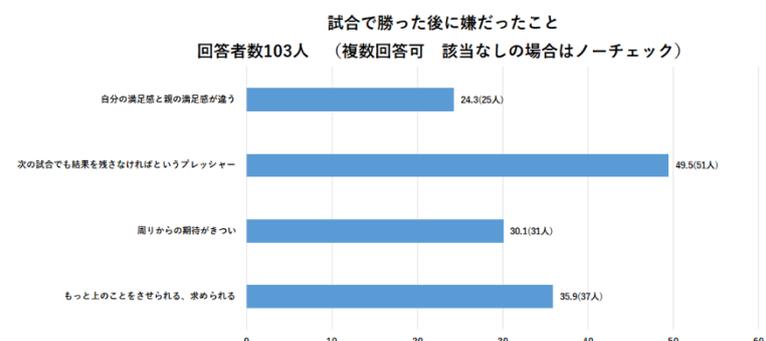


図 4.10 アンケート結果⑩

試合で勝った後に嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか
回答者数93人 (複数回答可 該当なしの場合はノーチェック)

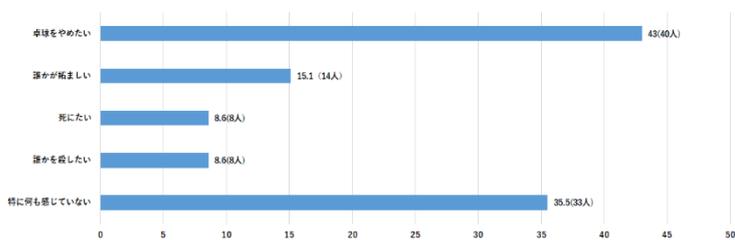


図 4.11 アンケート結果①

試合に負けた後に嫌だったこと
回答者153人 (複数回答可 該当なしの場合はノーチェック)

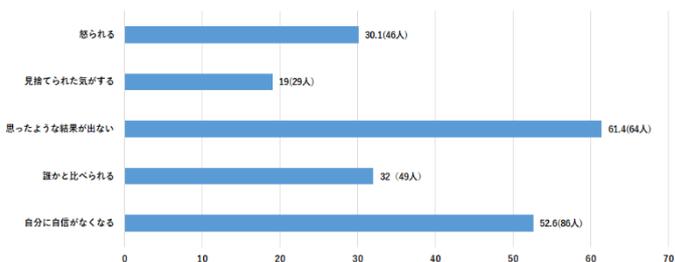


図 4.12 アンケート結果②

いう回答も多いが、ほかの場面よりも『やめた

試合で負けて嫌だったことはあなたをどんな感情にさせたか
回答者数97人 (複数回答可 該当なしの場合はノーチェック)

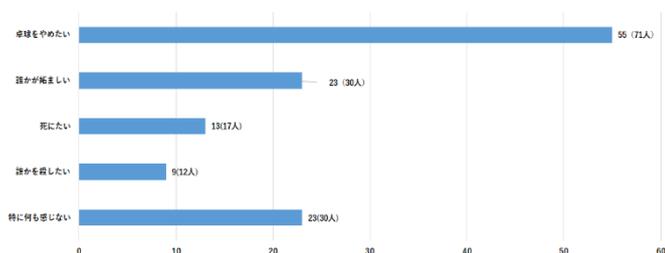


図 4.13 アンケート結果③

い』、『誰かを殺したい』というメンタルの重症化が大きくなっている (図 4.13)。

これらの結果から早期スポーツ教育を始めた年齢とネガティブなメンタルの重症化の関係を調べてみたところ、0歳から3歳で早期スポーツ教育を始めた人が『死にたい』、『殺したい』という感情になった人は66%、4歳から6歳で始めた人は22%、7歳から9歳で始めた人は8%、10歳から12歳で始めた人は20%という結果になった。

5. 考察

以上のことから早期スポーツ教育を考察すると、早期スポーツ教育の事後評価がプラスだったと86.3%が答えている。しかし、多くの方は自ら進んで早期スポーツ教育をやっているようには見えない上に、例え自ら進んで早期スポーツ教育を始めた人でも約30%がネガティブなメンタルの重症化が起こっている。従って、早期スポーツ教育には危うさがあるため、親が守ってあげなければならない。また、早期スポーツ教育を始めた年齢とネガティブなメンタルの形成に相関は見られなかったが、0歳から3歳は飛び抜けて重症化が見られることから、早期スポーツ教育を始める年齢には限度があると考えられる。そして、試合で負けた後のメンタルは、他のどの場面よりも重症化が起こりやすくなる傾向があるため注意していく必要がある。

2019年度福岡県卓球行事計画 (福岡県卓球協会 (2019)) によると、小学生の大会は14大会計画されている。それに加え、ローカルの大会や練習試合なども含めればそれ以上になる。平均で毎月1回かそれ以上の試合のために嫌々ながら練習をし、試合があるたびに危険な精神状態になり、それを積み重ねている。それらを踏まえ、親は子どもがこのようなメンタルになりやすいことを理解し、試合数を自重していく必要がある。また、勝敗にこだわらず子どものケアを第一としていくことが重要である。

6. 結論

本研究を通して、選手の視点からの早期スポーツ教育について調査することで、親が子どもを守るために何を気を付けなければならないかを初めて明らかにすることができた。一方、今後の課題として、早期スポーツ教育の途中で卓球をやめてしまった学生などを研究することが必要である。

参考文献

石山貴章, 久崎孝浩, (2012) 「ジュニアスポーツはいかに実践されていくべきか (1) - 軟式少年野球チームに所属している子どもたちと母親の声から - 」, 応用障害心理学研究, 第 11 号, pp.31-43

福岡県卓球協会, (2019) 年間行事,
<https://fukuoka-tta.jp/img/event.pdf,2020/1/25>
にアクセス

公益財団法人 日本オリンピック委員会 (2019)
JOC エリートアカデミー事業,
<https://www.joc.or.jp/training/ntc/eliteacademy.html>, 2019/10/21 にアクセス

文部科学省, (2012) 幼児期運動指針,
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisinn/1319771.htm, 2018/10/29 にアクセス

中村和彦 (2008) 『今日の子どもスポーツの問題点を探る』 児童心理, 62 巻,14 号,pp23-28
小倉晃布, 早田剛, 長谷川晃一 (2017) 「子どものスポーツ活動への親の意識に関する研究」, 教職教育研究, 第 1 号, pp.69-74

Rallys.online (2019) ワンランク上の卓球の裏側, <https://rallys.online/serial/miyazaki03/>,
2019/11/18 にアクセス

YOMIURI ONLINE (2017) 早期スポーツエリート教育は悪か,
<https://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/20170503-OYT8T50000/4/>,2018/10/29 にアクセス